

## ワークショップ「道徳心理と社会認知」提題

### 「自由意志と責任に関する実験哲学研究とその意義」

鈴木貴之（南山大学）

責任をめぐる実践は、われわれの社会实践・道徳実践の中核をなす。われわれは、ある人のある行動がその人の自由意志に基づくものだと考えれば、それを賞賛したり、非難したりする。その行動が自由意志に基づかないと考えれば、われわれの対応は変化する。

近代以降の哲学において問題とされてきたのは、自然科学的な世界観が正しく、因果的決定論が成り立つとすれば、自由意志は否定されるのではないか、そしてその結果、われわれは行為の責任を問うことができなくなるのではないか、ということである。

この問題に関して、これまで哲学者が行ってきたのは、さまざまな論証や思考実験を通じて、因果的決定論と自由意志は両立可能かどうかを明らかにするということである。しかし、ここで問題となっているのが、われわれは両者は両立可能だと考えているのかどうかということだとすれば、それを実際に調べてみるのがもっともよい方法だということになる。実験哲学者は、近年このような質問紙調査を実際に行っているが、その結果は両義的である。

わたしは、実験哲学者の意図には共感するが、よりよい調査の方法があると考え、ここ数年質問紙調査を行ってきた。その結果明らかになったのは、自由意志や責任に関する一般人の判断には、個人内でも個人間でも多様性が見られ、自由意志や責任に関する判断メカニズムの一般的なモデルを作り出すことは困難だということである。

このような研究に対しては、二つのまったく異なる批判が予想される。一方で、伝統的な分析哲学者は、一般人の非反省的な直観は、哲学的な問題を考察する上で重要な役割を果たさない、と主張するだろう。一般人は、哲学的に重要な概念を正確に理解しているとはかぎらないし、自らの回答が首尾一貫しているかどうかにも無頓着だろうからである。

他方で、道徳に関する心的メカニズムの経験的な研究として見たときに、この種の質問紙調査は不十分なものであるかもしれない。第一に、自由意志や責任に関するわれわれの判断は、一方向に進むものではないかもしれない。第二に、われわれの判断メカニズムは、そもそもいわゆる素朴心理学の語彙によって適切に記述可能なものではないかもしれない

これらの批判がどの程度的を射たものであるかは、哲学において自由意志が問題となるときには、正確には何が問題になっているのか、あるいは、何が目指されているのかということ次第であるように思われる。ここで問題となるのは、①自由意志の問題は、世界のあり方に関する問題なのか、われわれの概念のあり方に関する問題なのか、②自由意志の問題は、記述的な営みなのか、記述的でない要素を含む営みなのか、といったことである。本提題では、自由意

志の哲学研究とは、われわれの概念の解明を一つの要素とする、記述的ではない営み（概念の修正や新しい概念の提案）である、というわたし自身の見解に基づいて、上記の批判への応答を試みたい。